

久喜市公文書館開館記念

甘棠院文書展



平成5年10月1日(金)～10月31日(日)

久喜市公文書館

開催にあたって

久喜市公文書館が、十月一日開館するにあたり、記念として『甘棠院文書展』を実施することになりました。

甘棠院は、古河公方五代（成氏・政氏・高基・晴氏・義氏）の内、第二代足利政氏が隠退して住んだ館を寺としたもので、政氏を開基、貞巖昌永和尚（寺伝では政氏の弟、系図では政氏の子）を開山として、永正十六年（一五一九）建立されたものです。臨濟宗円覚寺派の寺院であり、古河公方菩提寺としては現存唯一の寺であり、中世・近世においては鎌倉円覚寺の直末寺として円覚寺と深い関わりを持っておりました。

甘棠院には、文書の外に国指定重要文化財「紙本着色伝貞巖和尚像」一幅をはじめ国認定重要美術品、県指定文化財など多くの文化遺産が残されていますが、これらは文書と共に現在埼玉県立博物館に寄贈（一部博物館にて借用）されています。

この度の甘棠院文書展は、『久喜市史 通史編 上巻』、『久喜市史 資料編 I 考古・古代・中世』、『久喜市史 資料編 III 近世2』、『久喜市史調査報告書 第十二集 諸家文書目録（II）』等久喜市史編さんの成果を参考にして企画いたしました。合わせてご覧いただくと更に理解が深まるものと存じます。

今回の展示は、当館の設置趣旨から記録遺産である文書を中心にして、「甘棠院文書」に「喜連川文書」（喜連川町教育委員会）「佐久間照夫氏収蔵文書」、「岡安参男家文書」を加えて、中世文書と近世文書とに分けて構成いたしました。

これを機会に、市民の多くの方々が久喜市の歴史を振り返り、記録遺産の重要性をご理解いただき、その保存と活用に一層のご協力をいただければ幸いです。

また、歴史的に重要な市の公文書その他の記録を継続的に収集・保存し、市民共有の財産として後世に伝え、市民等の利用に供する施設としての当館の設置趣旨をご理解いただき、今後の皆様方の積極的なご活用をお待ちしております。

最後に、この記念展を開催するにあたり、格別のご協力を賜りました甘棠院住職中村周保氏をはじめ、埼玉県立博物館と栃木県喜連川町教育委員会その他多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成五年十月

久喜市公文書館長 飛 高 守

表紙写真

36 絹本着色足利政氏像

（甘棠院所蔵 県指定文化財）

古河公方第二代足利政氏の寿像（生前に描かれた像）で、古河公方五代のうち、唯一の肖像画である。

縦一〇七・七cm、横五十二・一cmの軸装（掛軸）曲条倚座（椅子に坐った僧の全身像）で彩色落款はない。賛は、鎌倉建長寺一六四世玉隠英瑛によって永正十八年（一五二一）に記されたもので、肖像もほぼ同時期に描かれたと思われる。

政氏は、享祿四年（一五三一）に六六歳で没した。甘棠院境内に五輪塔の墓があり、地輪正面に「享祿四年七月十八日 甘棠院殿吉山長公大禪定門」とある。

相公自一主関東祝髮令婦仏法

中珍重閣浮提寿考吉山元是

福山翁

右関東將軍法諱道長字

吉山請寿像贊謹奉贊

永正龍集蛇兒之歳四月初吉

住山建長玉隠釈沙門英瑛

満九十書于聴松軒下

勅 特賜宗猷大光禪師

甘棠小比丘白書



35 紙本著色伝貞巖和尚像

(甘棠院所蔵 国指定重要文化財)

縦九〇・四cm、横四六・〇cmの軸装(掛軸) 曲糸倚座(椅子に坐った僧の全身像)で彩色、落款(署名)は「月庵作」、印は「源」「直朝」とあり、賛はない。

作者は古河公方足利氏の重臣で、幸手城主一色直朝である。直朝は、和歌集「桂林集」の作者で、武将であるとともに優れた文化人でもあった。

貞巖昌永は、甘棠院の開山で、寺伝では政氏の弟(「甘棠院由緒書上」)、系図では政氏の子(「喜連川判鑑」とする。法系は不明だが、法諱の「昌」から夢窓派とされる。生年は未詳。「武蔵國郡村誌」には、政氏没後に京都天竜寺より来た僧としている。「寺院明細帳」には政氏の弟、京都天竜寺の生徒であったものをよんで開山としたとしている。元龜三年(一五七二)正月十三日に没した。

甘棠院とその文書

甘棠院は、古河公方第二代足利政氏が、その子高基に古河を逐われ隠退して住んだ館を寺としたもので、永正十六年（一五一九）貞巖昌永和尚（寺伝では政氏の弟、系図は子）を開山として建立された。こうした経緯は今回展示した近世の由緒書に詳しく記されている。（資料No.18、20、22）

甘棠院は、臨済宗円覚寺派の寺院で、永安山甘棠院といい、山号は鎌倉公方二代足利氏満の法名、院号は政氏の法名による。中世・近世においては鎌倉円覚寺塔頭黄梅院の直末寺として、円覚寺と深い関わりをもっている。

足利政氏は、文正元年（一四六六）の生まれで、政氏の名は室町幕府第八代將軍義政の諱「政」の字を受けたものと思われる。父成氏を継いで古河公方の二代目に就任した時期は明確ではないが、現在知られている政氏の発給文書の内最も古いものが、長享二年（一四八八）なので、この年以前であると思われる。

甘棠院に遺されている中世文書の中で最も古いものは、明応三年（一四九四）頃と推定される円覚寺一四六世芳林中恩に宛てた文書である。（資料No.1）また、甲斐の武田信玄は永祿十二年（一五六九）以降、小田原の後北条氏（北条氏康）、越後の上杉氏（上杉謙信）と敵対関係にあり、しばしば武蔵に侵攻した。その際に久喜近辺では元龜二年（一五七一）六月甘棠院や源長寺（羽生市）に龍の朱印を捺した禁制を出して、武田氏の軍勢が濫妨・狼藉をすることを禁じている。（資料No.2）

古河公方五代（成氏、政氏、高基、晴氏、義氏）の内、義氏は、天正十年（一五八二）に公方在職のまま古河城で没した。四二歳であった。葬儀の場所は、義氏の後見人北条氏照の指示により甘棠院で行うことが決まり、翌年一月に行われている。（資料No.3、4）

豊臣秀吉は、四国、九州を平定後、天正十八年（一五九〇）後北条氏の小田原城を包囲した。豊臣方の諸將が次々と伊豆・相模・武蔵・上野の後北条方を攻略していく中で、秀吉は、各地の寺社や郷村に宛てて三か条の禁制を下し、豊臣方の軍勢による乱暴狼藉、放火などを禁じている。（資料No.5）

また、秀吉は、義氏亡きあと、古河公方家の滅亡を惜しみ、義氏の遺児氏女に、三三三石の知行地を与え、小弓公方足利国朝（足利義明の孫）と結婚

させ、国朝没後は弟頼氏と再婚させた。国朝の父頼淳は秀吉から、下野喜連川に知行地を与えられ、その子孫は喜連川氏を称することになり、古河公方家の系譜が繋がった。喜連川氏は、三千石ながら大名の格式を保ち、甘棠院と喜連川氏は深い結び付きを保ったまま近世に至っている。（資料No.30、32）

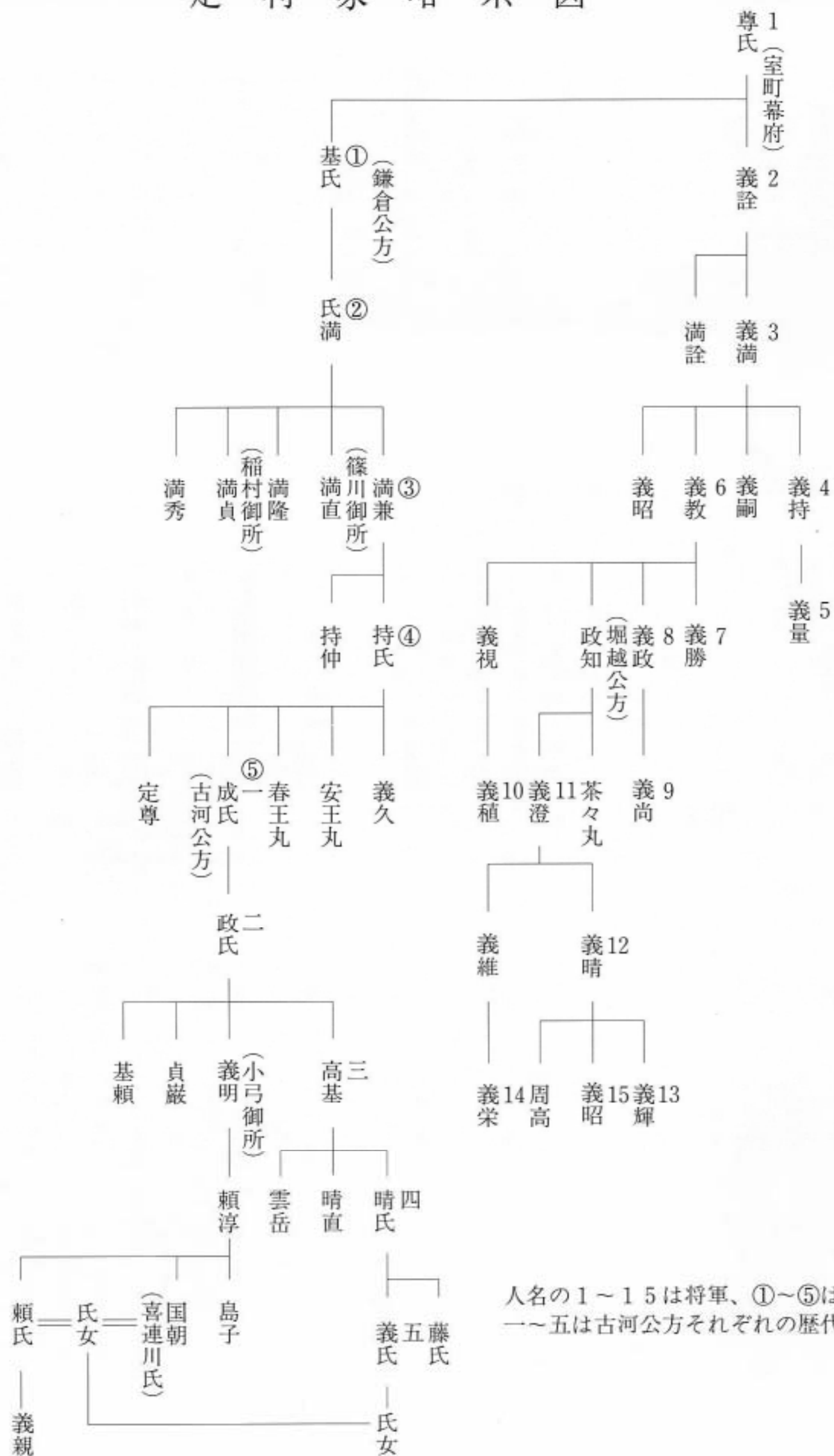
徳川家康は、天正十八年関東移封後、翌十九年には家臣や寺社に知行地を寄附した。中世以来の格式を有していた古刹を中心に朱印状を発し、寺社領を家康の権威によって規定しなおしたもので、これによって寺社は、徳川の権力機構の中に取り込まれていった。甘棠院にも写しではあるが、家康以降歴代の將軍の寺領百石の朱印状が遺されている。（資料No.6、8）朱印状は將軍が替わる度に前の將軍の朱印状を持参し、新しい將軍の朱印状を発給してもらった朱印改があり、その際の文書も遺されている。（資料No.9、10）

また中世以来幕府の庇護を受けた宗派では、有力寺院の住職の任命には、將軍家の許状が発給され、禪宗ではそれを公帖（こうじょう）と称した。甘棠院には、徳川歴代の発した公帖が遺されている。（資料No.23、25）また甘棠院には、五山派の本山である円覚寺が行う僧職の補任状（資料No.26、28）も遺されており、甘棠院と円覚寺や瑞泉寺との深いつながりを示すものとして貴重なものである。

甘棠院は寺領百石を給付されていたが、県内でも百石を超える例は数少ない。甘棠院には、その寺領を示す寺領絵図が遺されており、現在の町並みとの比較においても面白いものである。（資料No.33、34）

最後に頂相について、甘棠院には、開山の貞巖和尚像（国指定重要文化財）や古河公方歴代のなかで唯一である足利政氏像（県指定文化財）、政氏夫人像を始め、歴代十九人の住職の像（頂相）が遺されている。甘棠院二世の雲岳周揚は古河公方第四代足利晴氏の弟で、天正二年に没している。政氏の墓とともに甘棠院境内に五輪塔の墓がある。頂相には賛・落款ともなく、作者は不明である。甘棠院三世季龍周興は足利義氏の奉行人の筆頭で、古河公方の縁者である。古河にあった永仙院（足利晴氏の菩提寺）の開山で、天正七年に没している。季龍周興とされる頂相には、賛はあるが、落款はなく、作者は不明である。甘棠院四世三伯昌伊も古河公方の縁者で、家臣烏海氏の出身である。公方家の奉行人。文祿二年円覚寺一五六世となり、円覚寺復興に多大な尽力を果たした。慶長十八年（一六一三）古河永仙院で没した。昌伊の頂相も賛、落款がなく作者は不明である。（資料38、40）

足利家略系図



人名の1～15は将軍、①～⑤は鎌倉公方一～五は古河公方それぞれの歴代を示す。

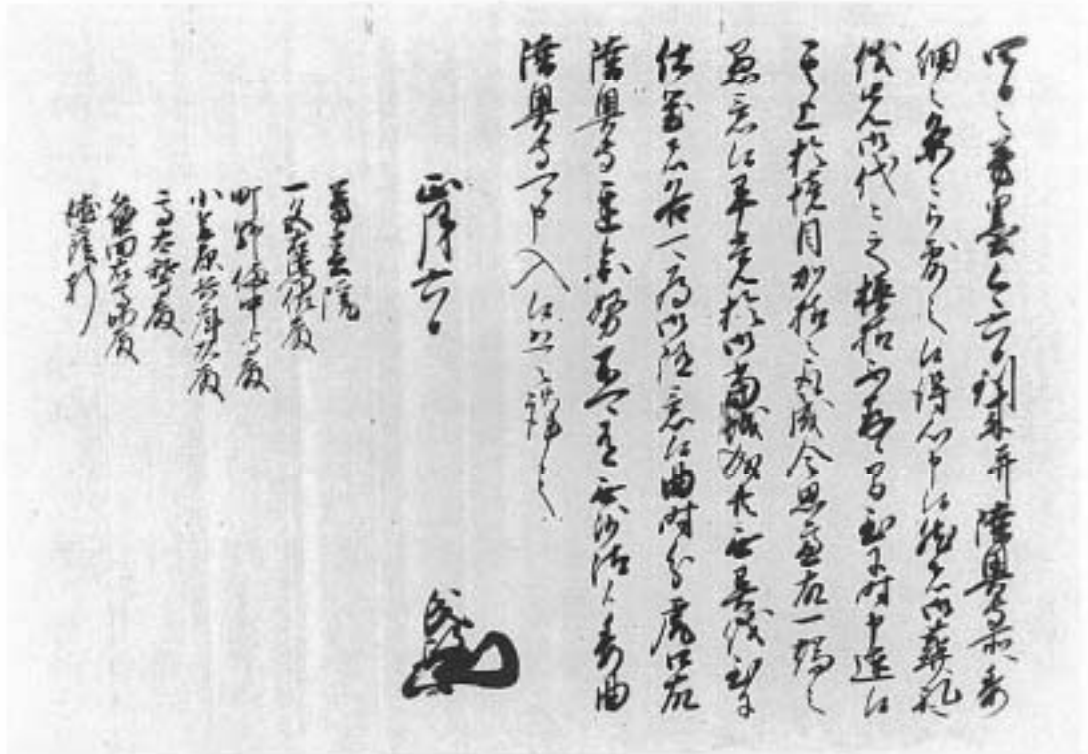
中 世 文 書



1 足利政氏書状



2 武田家高札



3 北条氏政書状



5 豊臣秀吉禁制



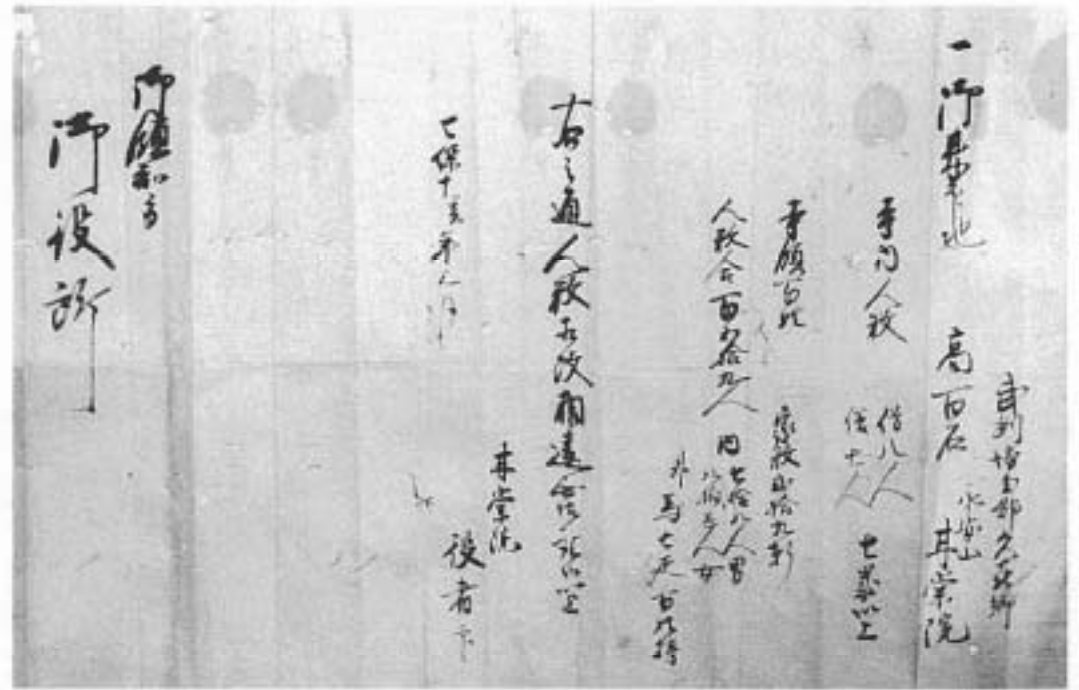
4 北条氏照書状

近世文書

寺領・經營



6 徳川家康朱印状写



1 1 甘棠院寺領家数人数書上



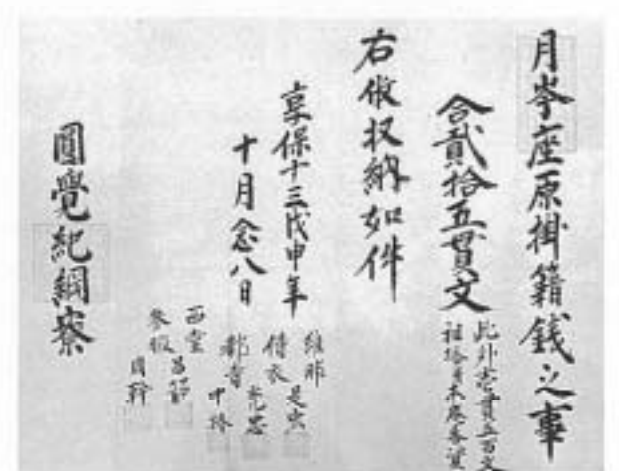
1 3 甘棠院寺領村支配請書



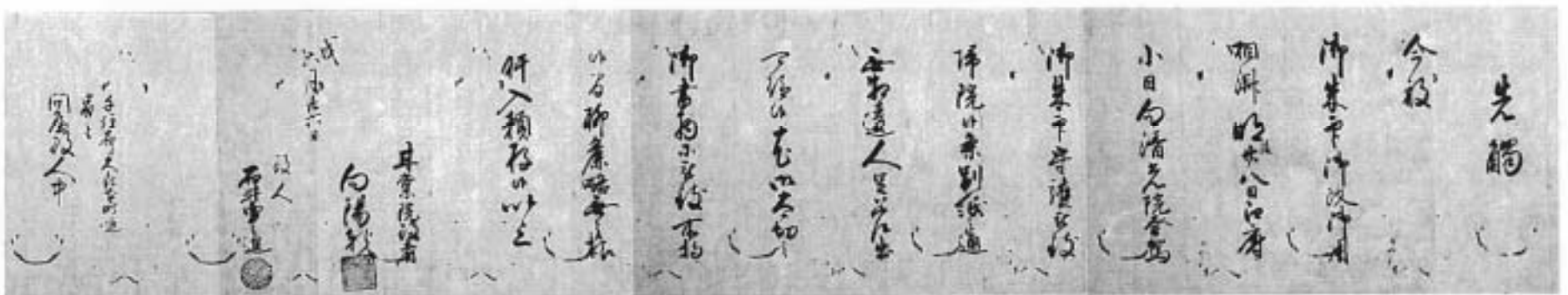
1 4 圓覚寺後堂寮官錢收納状



1 5 圓覚寺前堂寮官錢收納状



1 6 圓覚寺掛籍錢收納状



9 朱印改婦寺先觸

由 緒



20 甘棠院由緒書上



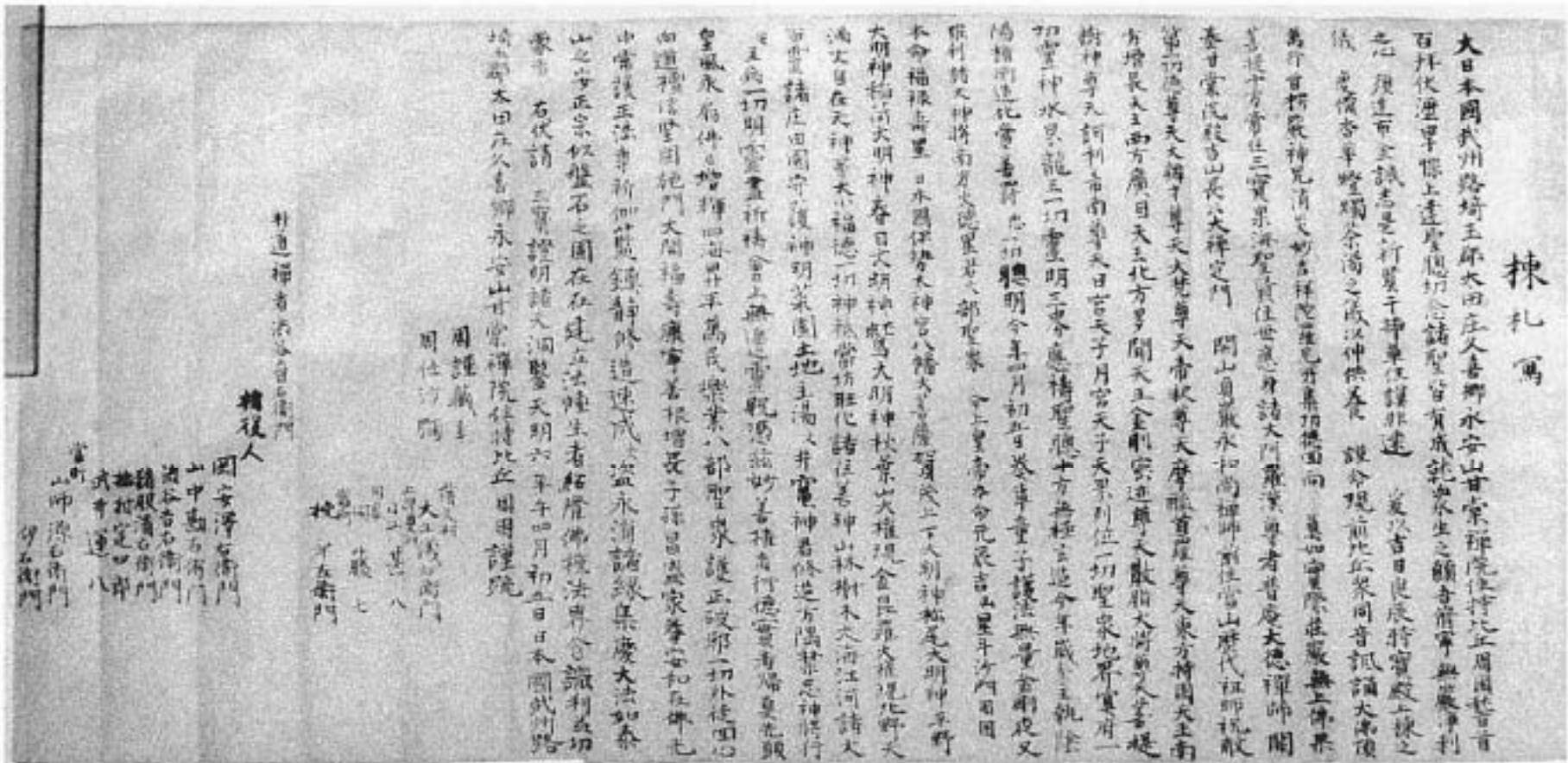
22 武州太田庄久喜之郷永安山甘棠院由緒之事



18 永安山甘棠院由緒書上

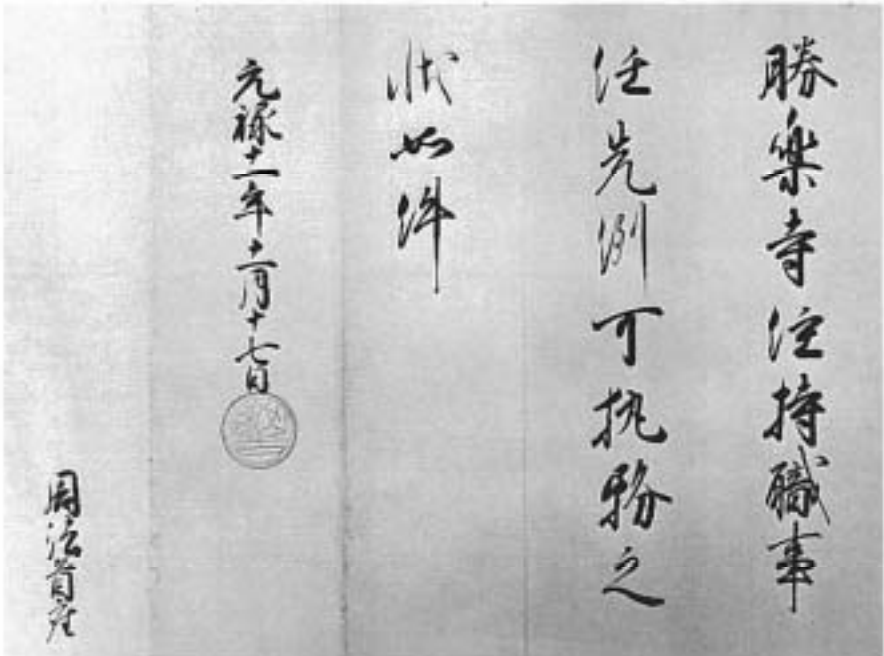


19 洪鍾銘写

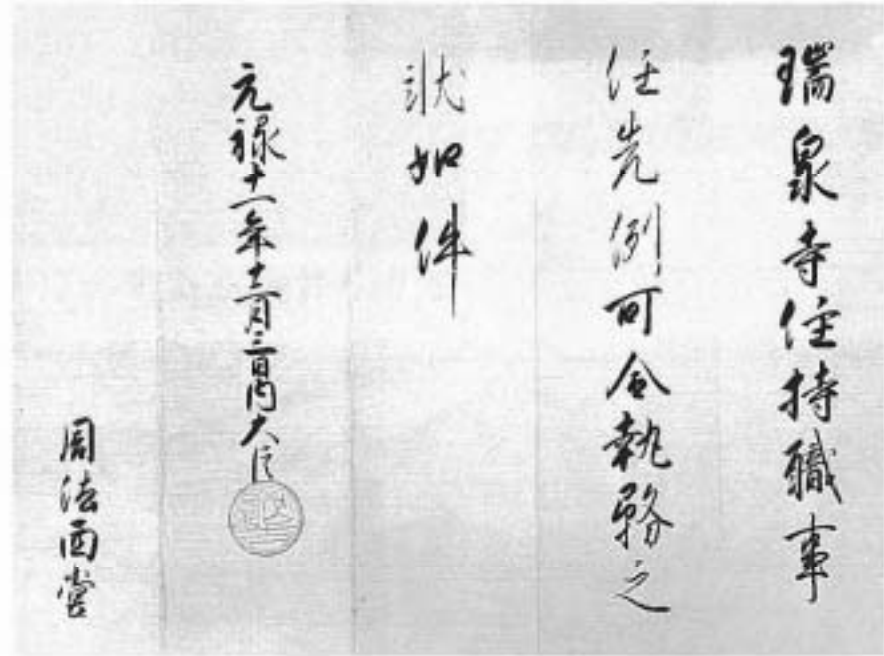


2 1 甘棠院棟札写

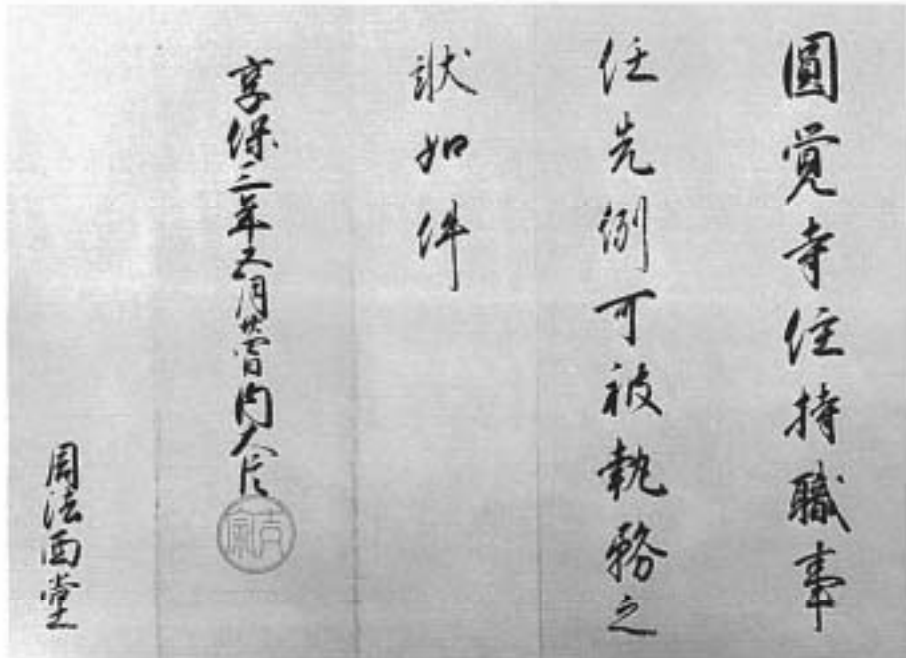
僧



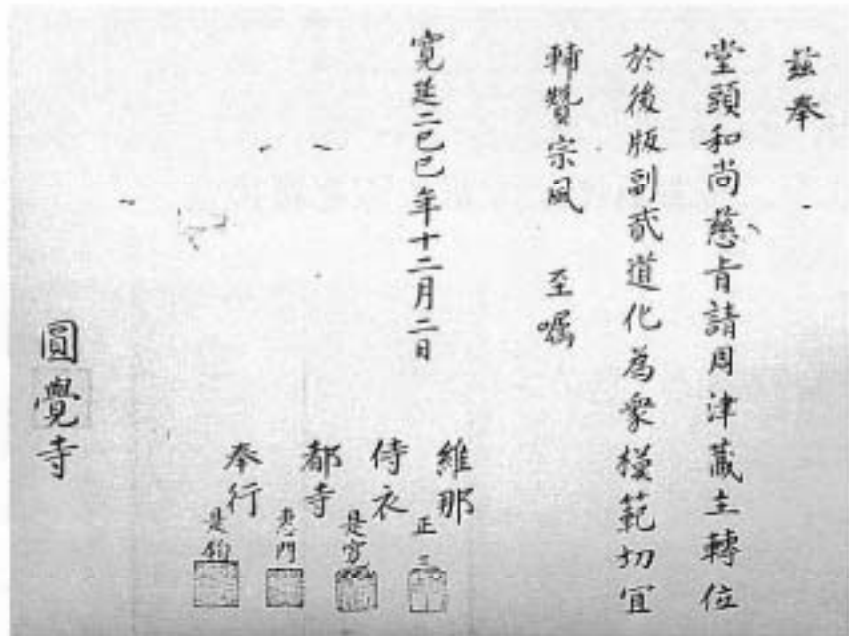
2 3 徳川綱吉公帖（勝楽寺）



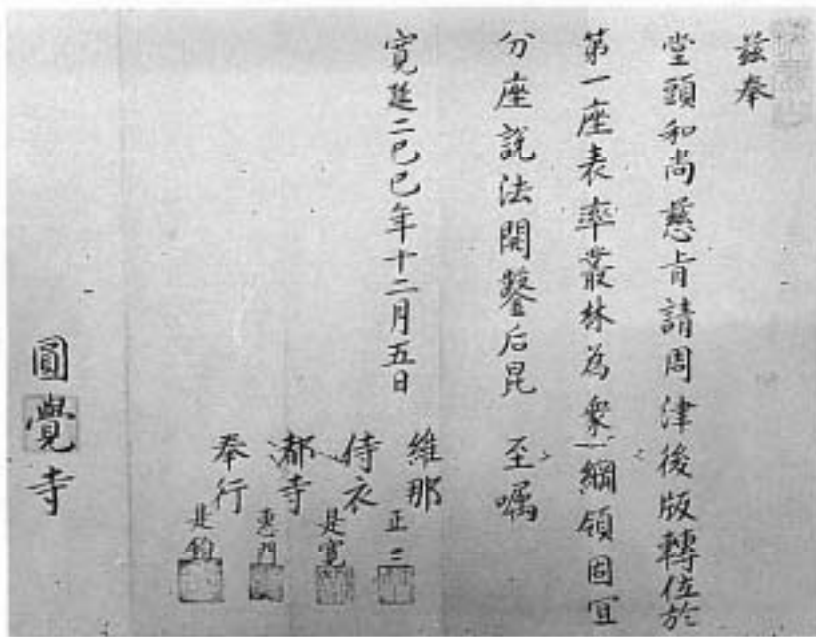
2 4 徳川綱吉公帖（瑞泉寺）



2 5 徳川吉宗公帖（円覚寺）



2 6 円覚寺後堂首座職狀



27 円覚寺前堂首座職状



28 円覚寺蔵主職状



29 甘棠院掟書

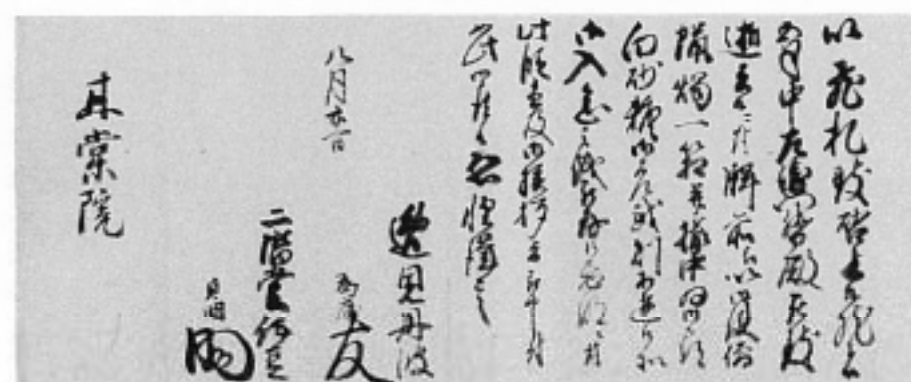
喜連川関係



30 二階堂貞明・大草久道連署書状



31 二階堂貞明・大草久道連署書状



32 二階堂貞明・逸見為庸連署書状

甘棠院文書展出品目録

No.	文書名	年号(西暦)	所有者	頁数	備考
中世文書					
1	足利政氏書状	2.27	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
2	武田家高札	元亀2.6.12	"	1通	"
3	北条氏政書状	(天正11)正.6	栃木県喜連川町	1通	
4	北条氏照書状	(天正11)正.8	"	1通	
5	豊臣秀吉禁制	天正18.5	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
近世文書					
(寺領・経営)					
6	徳川家康朱印状写	天正19.11	埼玉県立博物館	1通	
7	徳川秀忠朱印状写	元和3.11.3	"	1通	
8	徳川家光朱印状写	寛永13.11.9	"	1通	
9	朱印改帰寺先觸	戌6.26	"	1通	
10	朱印状帰寺二付人足催促状并宿制	戌6.26	"	1通	
11	甘棠院寺領家数人数書上	天保10.3	佐久間照夫氏(久喜市)	1通	
12	甘棠院領宗旨御改帳	享保7.2.20	"	1通	
13	甘棠院寺領村支配請書	天保10.7	岡安参男氏(久喜市)	1通	
14	円覚寺後堂寮官銭収納状	享保12.10.4	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
15	円覚寺前堂寮官銭収納状	享保12.10.7	"	1通	"
16	円覚寺掛籍銭収納状	享保13.10.28	"	1通	"
17	甘棠院門前議定書	嘉永4.4	埼玉県立博物館	1通	
(由緒)					
18	永安山甘棠院由緒書上	慶長8.11	埼玉県立博物館	1通	
19	洪鐘銘写	(明暦2.12)	"	1通	
20	甘棠院由緒書上	延宝9.2	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
21	甘棠院棟札写	(天明6.4.5)	埼玉県立博物館	1通	
22	武州太田庄久喜之郷永安山甘棠院由緒之事	天明7.8	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
(僧)					
23	徳川綱吉公帖(勝楽寺住持職)	元禄11.11.17	甘棠院	1通	埼玉県立博物館借用
24	徳川綱吉公帖(瑞泉寺住持職)	元禄11.12.3	"	1通	"
25	徳川吉宗公帖(円覚寺住持職)	享保3.5.24	"	1通	"
26	円覚寺後堂首座職状	寛延2.12.2	"	1通	"
27	円覚寺前堂首座職状	寛延2.12.5	"	1通	"
28	円覚寺蔵主職状	明和7.3.12	"	1通	"
29	甘棠院掟書	安永9.7	"	1通	"
(喜連川氏関係)					
30	二階堂貞明・大草久道連署書状	(正徳4).正.7	埼玉県立博物館	1通	
31	二階堂貞明・大草久道連署書状	5.6	"	1通	
32	二階堂貞明・逸見為庸連署書状	8.21	"	1通	
(絵図)					
33	甘棠院寺領絵図	元禄14.8.17	埼玉県立博物館	1通	

No.	文書名	年号(西暦)	所有者	員数	備考
34	甘棠院絵図		埼玉県立博物館	1通	
	(頂相)				
35	紙本著色伝貞巖和尚像		甘棠院	1幅	埼玉県立博物館借用 パネル
36	絹本着色足利政氏像	永正18.	"	1幅	" パネル
37	足利政氏夫人画像	天文12.	"	1幅	" パネル
38	紙本着色雲岳周揚像		"	1幅	"
39	" 季龍周興像		"	1幅	"
40	" 三伯昌伊像		"	1幅	"
41	" 東英周龍像		"	1幅	"
42	" 燈外周法像		"	1幅	"
43	" 月岑周珊像		"	1幅	"
44	" 天啓周津像		"	1幅	"

※ 展示期間中、一部展示替します。

公文書館利用案内

- 開館時間 / 9:00～17:00
(特別展の公開は10:00～16:00)
- 休館日 / 土曜日・日曜日・国民の休日
年末年始
(特別展の公開中は、日曜日も開館します)
- 交通案内 / JR宇都宮線・東武伊勢崎線
久喜駅西口下車徒歩17分(久喜市役所西側)

今回の展示開催にあたり、下記の機関並びに方々にご協力を頂きました。

協力機関(順不同、出品機関を除く)

栃木県立博物館

協力者(敬称略、順不同、出品者を除く)

新井敏男 武井 尚